



232号

2018 / 4 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方
☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



自宅のヤオトンの前で剪紙を剪る高鳳蓮さん せん さ き 高鳳蓮さん(1936～2017年)は陝西省の、通称「陝北」と呼ばれる黄土高原のど真ん中に生まれた。貧しく厳しい日々の生活に追われ、学校に行く機会に恵まれず文字を知らない。1980年代、中国政府やユネスコによって中国民間芸術に脚光が浴びるようになると、子供の頃、母親について剪紙を剪っていたことを思い出してハサミを握った。他の追従を許さない異能を発揮し、各地で開催の中国民間芸術・剪紙展覧会では数々の大賞に輝いた。高鳳蓮さんの作品についての評論は本誌に掲載中。5月14～18日には、高鳳蓮さん初期の作品を含む陝北剪紙展(本誌24ページで紹介あり)が東京中国文化センターにて開催される。(1998年、周路氏撮影)

‘わんりい’2018年4月号の目次は24ページにあります

今月は、戦国時代、斉の宣王(在位前319～301年)のお話です、この宣王は、昨年わんりい7月号のこの欄で取り上げた、「三年、鳴かず飛ばず」のお話の主人公・威王の子供です。(史記では、もう一人楚の荘王にも同じ逸話を載せています)。



斉の宣王が、嘗て孟子に、どうしたら立派な王様になれるかと訊ねました。孟子は、それに答えて言いました。

「すぐれた国王になりたいと思ったら、国民に落ち着いた生活を保障し、楽しく働けるようにしなければなりません。と同時に、自分の国を十分に理解して、何をすべきか、何をすべきではないかをきちんと知らなければなりません。つまり、国民みんながあなたを立派な王様だと認めてこそ、あなたは立派な国王なのです」

斉の宣王は孟子の教えを実行に移しました。国の政治には、強い意気込みを持って努力を重ね、国民の生活状況に対しては、秋毫明察(細かいところまで見逃さないように目を配り)で、数年後には、斉の国は更に強力な国家となりました。



言葉の説明：人の目配りが鋭敏で、どんな小さなことも見逃さずはっきりと見て取ることが出来ることを指している。

例文としては、警察の人達は皆、秋毫明察で、どんな「蜘蛛の糸と馬の足跡(微かな手がかり)」も見逃さず、素早く犯罪を暴き出し、犯人を逮捕する、とあります。

ここで言う「秋毫」とは、山野の獣の身体が冬毛に変わる時、初めに生えて来る極く細い毛のことで、目を凝らしてみないと分からないが、確実な変化の兆しであることを表しています。そして、その変化をはっきりと見抜き、見逃さないことを「秋毫明察」というのです。

ところで、このお話では孟子が国王に、国王としての心構えを教え、民を大事にすることが、国の繁栄を勝ち

取る近道であると説いています。皆さんは、孟子に関してどんなことをご存知ですか？ 私はお恥ずかしいことに、孟子のお母さんが、子の教育のために3回も引っ越しをした(孟母三遷)こと、孟子は儒教(この言い方にも賛否あるようですが、ここでは便宜上、こう言います)の中興の祖であること、性善説を唱えていることくらいしか知りませんでした。

聴くところによると、孟子は、政治の要諦を国民の生活安定に置き、君子たるものはそのことに全身全霊で当たらなければならないと説いたのです。

儒教は社会秩序を重んじ、主には忠、親には孝を尽くすことが良いこととされ、急激な変化を嫌うとみられています。一般に、文化大革命のときの紅衛兵ほどではないにしても、儒教思想がアジアの発展を少なからず阻害したと考える傾向がありました。

ところが、最近10年ぐらいの間に、世界的に、勿論中国や日本でも、この考え方に疑問符がつけられ、特に孟子の言行が例として引かれるようになりました。孟子は、為政者の諮問に対して、政治の基本は民の生活の安寧にあると答えています。又、大臣の職責を訊ねられた時も、詳しく答えています。大臣が諫めても国民のことを考えない君主がいた場合、才能を見込まれて外部から来た大臣には、サッサと辞めてもっとましな君主に仕えるようにと勧め、君主の親族である大臣に対しては、命を賭して君主を強く諫め、それでも改めない時は、一族で相談して君主の首を挿げ替えるようにと進言しているのだそうです。孟子の活躍した時代が戦国時代だと言っても、このような過激な発言は、かなりショッキングなものでしょう。

それでも、その思想のよって立つところが、民の立場であり、民を見据えての発言であるところに、何かほのぼのとした感慨を覚えます。二千年以上も昔に、人民のことを主体に考えるべきだと言う、文字通りの民主的な考えが中国に存在したことに驚きを感じます。



Shēng táng rù shì

升堂入室

のぼ
堂に
のぼり
室に入る

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



子路^{しろう}と言えば、孔子門下では最年長の弟子で、勇猛を以て鳴る人物です。『論語』では子貢と並んで最も多く登場します。決断力と忠誠心に富み、多方面からその政治手腕を買われていました。『論語』には「政事冉有、季路 (Zhèng shì rǎn yǒu, jì lù) (政事には冉有、季路)〈先進第十一〉とあります。ともに孔子の弟子で、ここでいう季路とは子路のことです。魯の権力者であった季康子から、子路の政治家としての資質を問われたとき、孔子は「由也果。於从政乎，何有! (Yóu yě guǒ. yú cóng zhèng hū, hé yǒu!)」(由や果なり。政に従うに於いて、何か有らん)〈雍也第六〉。子路は決断力のある人物だから、政務に従事させても何ら問題ない、と答えています。由とは子路の本名です。これを見ても子路は孔子から厚い信頼を得ていたことがわかります。

しかし一方、気性が荒く、学問を軽視する傾向がありました。まだ若い、学問的にも未熟な弟子の子羔を、子路が費という村の宰(管轄官)に抜擢したとき、孔子は、早すぎる抜擢はかえって本人を駄目にする^こと忠告しました。これに対して子路は「有民人焉。有社稷焉。何必读书，然后为学! (Yǒu mǐn rén yān. Yǒu shè jì yān. Hé bì dú shū, rán hòu wéi xué!)」(民人有り、社稷有り。何ぞ必ずしも書を読み、^{しか}然る後に学と為さん)〈先進第十一〉。民をしっかりと治め、その土地をしっかりと守ること、これが立派な学問修行というものではないですか。その前にまず本を読んでからというものでもないでしょう、と言って孔子の忠告に耳を貸しませんでした。これを聞いて孔子は「是故恶夫佞者 (Shì gù wù fū níng zhě) (是の故に夫の佞者を悪む)〈同上〉。だから屁理屈をこねる奴は嫌なんだ、とボヤいています。こ

ういった子路の頑固さには、さすがの孔子も手を焼いていたようです。

さて、この子路、ある日孔子の塾の門前で得意げに瑟(五十絃琴)を奏でていました。日ごろから音楽に厳しい孔子にとっては、とても聞くに堪えない、荒っぽい弾き方だったようです。ところが子路は意に介する様子もありません。そこで孔子は多くの弟子の前でついボヤいてしまいました。「由之鼓瑟，奚为於丘之门! (Yóu zhī gǔ sè, xī wéi yú qiū zhī mén!)」(由の瑟を鼓す、奚為れぞ丘の門に於いてする)〈先進第十一〉。子路の奴、何でまた丘(丘は孔子の本名)の門前で瑟など弾くのだろう、と。あまりにも粗野で聞いておれない、というわけです。そのせいで若い門人たちは子路を見下すようになりました。これはまずいと思ったのか孔子は次のように弟子たちに語りました。「由也升堂矣。未入於室也 (Yóu yě shēng táng yǐ. Wèi rù yú shì yě) (由や堂に^{のぼ}り。未だ室に入らざるなり)。子路の腕前は既に水準に達している。ただ熟達の域に至っていないだけだ。つまり私のハードルが高すぎたのだ、と。堂とは南に面した客間のこと。地面よりは高いところにあるので、「堂に^{のぼ}る」とは、ある程度の高みに達することです。室とは奥の間のこと。したがって「室に入る」とは技能が奥義を窮めることをいいます。孔子はふと漏らした自分の一言が、子路の体面を傷つけたことに気づき、若い門人たちの前でこのような心にもない言い訳をしたのです。この一事からも弟子に対する孔子の細やかな気遣いが読み取れます。

ちなみに日本では、技能が熟達することを「堂に入る」と言いますが、語源はここから来ています。

(わりりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

旅の二日目、10月20日の朝が来た。今日は、峨眉山に登るので、6時半頃起床して7時過ぎにフロントで押金の精算などした後、朝食はあきらめてタクシーで成都駅に向かった。友人がまとめて窓口で切符を求めに行くと、峨眉山行きの高鉄は「成都南站」から出るのでそこで切符を買うように、と言われたとのこと。成都駅と成都南站駅は広い成都市内の北と南でかなり距離がある。仕方なくまたタクシーに乗ってそちらに向かった。結局早起きしたのに、9時32分発の高鉄に乗ることになった。切符を見ると「C6262号」となっており、頭文字が高鉄といったのにGではなくCとなっている。GaoのGなのにCとはなぜか良くわからない。料金は、二等座(普通車)であるが一人62円で日本円で千円弱なので安い。高鉄に乗るたびに安いと思う。朝食は友人がどこからか油条やヨーグルト等を買ってきたので、駅の待合室で食べることにした。

時間が近づいたので、切符を機械に通してホームに降り立った。今回は高鉄(?)は定刻に発車した。峨眉山駅に10時45分に着いたが、参考までに停車駅を以下に書くと・・・

成都南站→双流機場→彭山北→樂山→峨眉山

である。「双流機場」とは「成都双流国際機場」(機場とは飛行場のこと)のことで、成都の国際空港の名前である。双流は飛行場のある地名である。中国の飛行場の名前の多くは、飛行場のある地名が入っている。たとえば「大連周水子国際機場」、「青島流亭国際機場」のように、である。ちなみに北京空港は「北京首都国際機場」が正式な名称である。峨眉山は、峨眉山市にあり山の名前が市の名前になっている。成都から南西にあるのでこの空港も市内から南西の方向にある。一時間余り乗ったが快適であった。峨眉山駅は、よくあるマッチ箱を縦にしたような駅ではなく、中国風の洒落た建物である。日本ではあまりお目にかからない建物である。駅前がタクシーやバスの乗り場になっている。友人は、どのバスに乗

ればいいのかかわからないと言うのでタクシーに乗った。乗ったタクシー運転手は何と女性であった。中国には何度も行ったが、女性ドライバーは初めてである。男性ドライバーのようにカミカゼ運転ではなく、安全運転で親切であった。

20分くらい乗ったであろうか。タクシーは峨眉山市内の今夜の宿、「峨眉山瑞邦莫麗酒店」に着いた。チェックインをして荷物を預ける。お昼近くになったのでホテルで美味しい店を訪ねると、ホテルの運転手がお店まで運転してくれた。その店の名は、「孔老二豆腐脳」という。帰国した後、辞書で「豆腐脳」を調べると「おぼろ豆腐」とある。豆腐をやわらかく固まらせたものである。友人によるとテレビでも放映され、〈お店も小吃も有名だ〉と言う。麺の上に豆腐脳と肉が乗って暖かくて美味しい料理であった。食事は旅先での楽しみの一つだ。食後またタクシーに乗り峨眉山の麓にある客運中心、つまりバスセンターに向かう。友人が窓口で切符を買おうとすると、30歳前後の女性が近寄り、「峨眉山の途中にある零公里までだが、往復3人で500円でどうですか?バスより少し高いかもしれないがすぐに出発できるしいろいろと案内もするから」とメリットを強調し勧めるのである。要は白タクの部類のようだ。3人で協議し、時間を有効に使えるし彼らの車に乗ろう、という結論になった。女性は我々をワンボックスカーのある場所に案内してくれた。零公里からは専用のバスに乗り換えるそうだ。そこでまた切符を買わなければならないので確かに500円(日本円で約7500円)は割高ではあった。車は川沿いに山奥に進んでいく。霧もかかって来たのに結構スピードを出す。運転手に命を託すしかない。ようやく峨眉山の中腹にある「零公里」に着く。ここに専用のバスが何台か待機しており、我々は専用バスに乗り込んだ。乗車料金は80元。どの位走ったか覚えていないが、ロープウェイ乗り場の近くの「接引殿」という建物のそばの停車場に着いた。麓から頂上まで階段もある



普賢菩薩のパートナー。牙が3本生えている。
峨眉山頂上の普賢菩薩像(霧ではつきりしない)。

ので、金を払いたくない人は歩くしかないが、なにしろ3千メートルを超える山なのだ。言われるがままに行くしかない。ロープウェイ乗り場まで歩いて行くと、またそこで乗車券を買わなければならない。ひとり65元だ。いい加減にしろ! と言いたくなる。

ロープウェイは大型で7～80人は軽く乗れそうだ。わいわいがやがやと沢山の人が乗り込みドアが閉まると、一気に上昇を始めた。かなりの急角度である。窓からは霧が深くなりあまり見えなくなった。ものの数分で上の駅に到着した。しかしここから20分くらい階段を上った。この辺りで少し頭が痛くなった。たいして気にはならなかったが、友人が高山病の徴候かもしれないと言う。この辺りはおそらく3千メートル位の高さの所に来ていよう。ゆっくりと歩くと、霧のためいつになったら頂上かわからない。足元を見ながら上ると、前方に幅の広い階段があり、その左右には象が向かい合って約50メートル間隔で置かれている。普賢菩薩と縁の深い動物だ。象の牙は左右とも3本ずつ有るがなぜかは誰も知らない。そのうちうっすらと金色に輝く普賢菩薩像が見えてきた。霧の中の菩薩像はとても神秘的である。

ようやく金頂に着いたのだ。金頂とは、前号で書いたが頂上に建てられている華蔵寺が太陽の光で金色に輝いて見えることからその名が付いた。そこには菩薩を仰ぎながら多くの人達が額づいて真剣にお祈りしていた。私も手を合わせた。この普賢菩薩像

は台座から約40メートルもある巨大な銅像で菩薩の顔や象も東西南北に向かって造ってある。台座の下から菩薩の胎内に入れるようになっているので、入って見ると中にまた大きないくつもの仏像が安置されていた。ここにいるとなぜか幸せな気分になってくる。寺院は頂上には華蔵寺だけであったが、改装中で中には入れなかったのが残念である。この峨眉山には後漢(AD25年から220年)から寺院が建てられるようになったとのことで、明清時代は100前後の寺院があったという。車

やロープウェイそして建設機械などのない時代に四大仏教名山をはじめ多くの山々に、よくこのような宗教建造物が造られたものと感心する。当時の人々の信仰心の強さとエネルギーは尊敬に値する。

峨眉山の名の由来は次の通りである。蛾眉山とも言うそうで「蛾眉」とは蛾の触角の形をした眉のこと、転じて美人をいう。峨眉山の頂上から二つの山が向かい合っているのが見えるそうだが、その山の稜線が美しい眉に見えることから付いた名前だろう。誰がこのような美しい名前を付けたのであろう。素敵な名前をもらってさぞかし峨眉山は喜んでいるのではないだろうか。峨眉山は昔から「峨眉天下秀」と褒め称えられているがこの霧では美しい姿を見るよしもない。峨眉山はまた「猿」が有名らしいがこの日は一匹も見ることが出来なかった。やはりもう一度天気の良い時に是非来てみたい。

また来た道に戻り、ロープウェイで下り、零公里から迎えに来ていた白タク(?)に乗って客運中心に着いた。そこで別のタクシーに乗り換え、ホテルに向かった。料金は60元くらいであったが、成都駅から峨眉山駅間の高鉄の料金と変わらない。峨眉山市仏光東路にある「峨眉山瑞邦莫麗酒店」に着いたときはあたりはすっかり暗くなっていた。夕食は火鍋を食べに行こうと言うので仕方なくついて行った。友人は火鍋を食べないと一日が終わった気がしないようであった。

(続く)

大本教と言っても、若い人はほとんど知らないでしょう。私が大本教のことを話題にすると、戦前生まれの人の中には「まだ大本教は存在しているんですか」と訊かれたことがありました。ことほどさように現在でも大本教の存在はとても小さく、希薄になっています。

➤ 聖師と慕われた王仁三郎

大本教は開祖と呼ばれている出口なおのお筆先から始まりました。京都の北部、綾部に住んでいた貧農出身で無学文盲の機織り女であった出口なおに、丑寅の金神という神がかかりました。精神分析の祖、ジークムンド・フロイド博士がいうところの、今でいう自動書記現象が起こり、神から「筆を持て!」と言われて書いた、いわゆるそのお筆先は、富国強兵政策を目指す日本の近代化への歩みに対する鋭い批判に満ちています。

その根本精神はまさに世直し宗教にふさわしく、私も魅せられました。このお筆先は現在、東洋文庫に『天の巻』『火の巻』という書名で刊行されているほどの豊かな内容と資料的価値が認められているものです。一昨年亡くなった安丸良夫氏（一橋大学名誉教授）の著作『出口なお』（朝日新聞社刊）は、出口なおの存在と意味、その予言者的な魅力を余すところなく伝えている名著だと思います。

大本教のもうひとりの教祖である出口王仁三郎は、大本信徒からは聖師と呼ばれて慕われている存在です。この開祖・出口なお、聖師・出口王仁三郎によって生まれた大本教は、戦前の1921（大正10）年、1935（昭和10）年の二度、帝国主義的な天皇制日本国家から弾圧を受けました。二度目の際は、亀岡の神殿などの聖地はダイナマイトで爆破されました。当時の大本教は革新将校なども入信するという存在感ある宗教団体としてあり、体制側が危機感を持っていたのでしょう。

➤ エスペラントと大本

王仁三郎は1871（明治4）年、京都の亀岡市の穴太あなおに生まれ、本名は喜三郎きさぶろうという名で、「きさやん、きさやん」とみんなから親しまれていました。その喜三郎も霊的な能力があり、神に祈っていると、「一日も早く園部に向かって行け」という神示が現れました。

彼はお齒黒をつけ、陣羽織という異様な格好で園部方面へ出発し、出口なおに出会います。なおも当時、神のお告げで「東からやってくる人」が、自分に懸かった神を審神にする人であると信じていたのです。

なおと喜三郎との出会いはまさに神の縁ともいうべきなのかもしれません。そして喜三郎は、なおの末娘であるすみと結婚し、喜三郎は名前を王仁三郎と改名しました。王仁三郎となおの結びつきで大本は教団として出発し飛躍的に発展しました。

通常、大本がエスペラントを導入するきっかけは、バハイ教との関係だとよく言われていますが、実際はそれ以前に王仁三郎はエスペラントを知っていたようです。

『反体制エスペラント運動史』（大島義夫・宮本正男著・三省堂刊）によれば、宮本が戦後、王仁三郎の懐刀といわれた教団幹部の大国以都雄に尋ねたところ、1918年（大正7）年、信徒の秦真次はたしんじがヨーロッパ視察から帰ってきた時、エスペラントをポーランドで知った、と言って王仁三郎に話したことが始まりだということです。

鋭い直感力を持っていた王仁三郎はその時、エスペラントの可能性を信じたのだと思います。秦という男は当時中佐、後に中将になった軍人、いわゆる革新将校でした。

➤ エスペラントを採用するバハイ教と大本

その頃王仁三郎は、役員の一部に「エスペラント

第22回 中国の大連に飛び立つ 出口王仁三郎

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓（おおるい よしひろ）

混沌の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ!」

は世界を支配する言葉になる」とも話していたようです。また1920年の春、東京の各所で大本の講演会があった時、熱心に聞いていたのはエスペ란ティストであり、詩人のエロシエンコだということです。（『日本エスペラント運動の裏街道を漫歩する』（小林司・萩原洋子著・エスペラント国際情報センター刊）

ロシアからやってきたエロシエンコはその後、大本本部を訪ね、エスペラントとの繋がりができたようですが、しかし実際にエスペラントを教団で奨励するようになったのは、やはりバハイ教との関係が大きいでしょう。

1922年、王仁三郎の妻・すみが静岡県三島から大仁おおひとに向かう車中で、アイダ・エ・フィンチというバハイ教徒のアメリカ婦人と出会いました。バハイ教は19世紀の半ば、ペルシャ（イラン）で生まれたイスラム教の改革派の宗教で、エスペラントを国際語に採用していました。ザメンホフの娘のリディアも最後はバハイ教に入信しています。

バハイ教のフィンチ女史は当時66歳。そして翌年の春、バハイ教のルート嬢とともに大本本部を訪れます。フィンチは、バハイ教ではエスペラントを国際語に採用していることを話したところ、王仁三郎のエスペラントへの関心は更に高まり、側近の加藤明子にエスペラントの学習を命じました。

京都の同志社大学致遠館での講習会があると知った加藤はそこに参加してエスペラントを学び、大本にも研究会が発足しました。王仁三郎もエスペラントを熱心に受講し、後に王仁三郎らしく、『記憶便法エスと歌辞典』を出版するほどでした。例えばその辞典では、牛乳はエス語でlaktoと言いますが、〈乳牛の乳汁多く搾らんと餅米喰わせば楽らクト（楽と）出る〉とか、mateno朝という単語では、〈朝寝して一足おくれ停車場へ友のあとから一寸マテーノ〉といった調子です。しかし明らかに軍国主義的な色あいが強い歌もあり、その点で宮本らは、世上いわれるように大本は戦前、決して平和運動一色ではないと厳しく批判しています。

また、「満洲国建設」に絡んで王仁三郎に対する

疑問が一部には出てくるのでしょうか。前出の『反体制エス運動史』ではこんなくだりがあります。

宮本「ところで、橋本大佐らの十月事件は、のちの「満州国独立」に結びつくものですが、大本がこれ

を支持した形跡が残っていますが・・・」
大国「そうですね・・・満州国についての大本の役割はそうです、石原莞爾がはっきり依頼したのでしょうが、『満州がいよいよ独立する。そのときにはエスペラントを採用する。これを満人に教えるための教師団の編成を大本で引き受けてもらいたい』というのが、この事件と大本とのすべてでした」

石原は東条英樹ら軍の主流派と意見の対立から満州から追われ、王仁三郎の満州国へのエスペラント導入は破綻したということです。

➤「日本人」を超えた王仁三郎

豪放磊落、ユーモアもあり日本人的な発想を超えスケールが大きい王仁三郎に魅力を感じる私ですが、この満州との関わり、大本第一次事件後の蒙古入りについては、私もまだ納得できないところがあります。

しかし、四代目教主の出口直美の婿にと、王仁三郎から強く要請され出口家入りした出口栄二が出征する時、王仁三郎に挨拶に行き、『一生懸命、お国のために闘ってきます』というような言葉を述べると「この戦いくさは、悪魔と悪魔の戦いじゃ。早はやう帰ってこい!」と、栄二に対して強く言ったそうで、この事実を直接私は、出口栄二氏から聞きました。

歌をたくさん詠み、高名な陶工から、耀椀と名付けられるほどの素晴らしい陶器を創り、また書でも凡人の域を大きく超えた王仁三郎の芸術家として側面を見ると、当時の一部の軍と一見同調するような動きをどう見るかは難しいところです。

それはさておき、今でも大本教団では信徒にエスペラントを奨めています。そしてエスペラント世界大会には大本は必ず、OOMOTOコーナーを設け、仕舞などを披露し、信徒の何人かは必ず参加していますので、世界のエスペランティストの間では、大本教は日本の宗教の代表的な存在に見られているようです。

東西文明の比較 (23)

▼唐は「内憂外患」▲

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

正式な国交・交流の時代

日本と中国は、長い歴史を持つ隣国ですが、正式な国交があった時期は決して長くありません。邪馬台国時代をしばらく措けば、4世紀末から5世紀末までの「倭の五王時代」、7世紀初期からの「遣隋使・遣唐使の時代」、そして15世紀初めから150年ほど続いた「日明貿易の時代」が全てです。遣隋使は600年に始まり、最後の遣唐使が出発したのは838年ですから、この間200年余りでしかありません。

隋の建国は589年、隋を引き継いだ唐の建国は618年で907年には滅亡しました。その間わずか318年です。あらゆる分野で「煌びやかさ」ばかりが言い伝えられているようですが、隋・唐は「内憂外患」でした。そうした状況を知るにつけ、日本海の荒波を越えて大陸へ渡った日本の遣使はどのように先進国の諸々を学んだのでしょうか。

中唐(8世紀半ば～)滅亡の影

安史の乱^{注)}で疲弊した唐は、中央アジアのみならず西域も保持することが難しくなり、国境は次第に縮小して世界帝国の威力を失っていきます。こうした状況に対して、中興の祖と謳われた憲宗は、中央の禁軍を強化して中央の命令に服さない節度使を討伐し、朝威を回復させることに成功しました。しかしその後、不老長寿の薬といわれた丹砂(水銀)をはじめ、怪しげな仙薬を常用するようになり、精神に不安定をきたして宦官をしばしば殺害したため、恐れた宦官により殺されました。後継いだ孫の文宗は権力を握っていた宦官を誅殺しようと策略を練ったが失敗し(甘露の変)、かえって宦官の専横を招きました。

晩唐(9世紀半ば～10世紀初頭)「乱」が全国に及ぶ

文宗の弟の武宗は廃仏毀釈を進めました。当時、脱税目的で僧籍を取る者が多かったため、実態の無い僧を還俗させ財政改善を図りました。この時期、牛僧孺党派と李德裕党派の政争が激しくなりました。これを「牛李の党争」といいます。

この頃から、859年の裴^{きゆう}甫の乱、868年の龐^{ほう}勛の乱に代表される、武装闘争が各地で起きました。やがて874年頃から「黄巢の乱」が起きます。この乱は10年に及び全国に波及、黄巢は長安を陥落させると斉を建てて、皇帝就位を宣言しました。しかし黄巢軍の構成員は多くが貧民出で政務を執行できず、略奪を繰り返して民衆の憎悪を買った挙句に長安を去りました。

この時、黄巢の部下だった朱温は黄巢を見限り唐に帰参。朱温は唐から全忠の名前を賜り、以後朱全忠と名乗りました。この頃になると唐朝の支配地域は主に首都・長安から比較的近い関東地域一帯にまで縮小し、藩鎮からの税収も滞りました。河南地方の藩師となった朱全忠は、唐の朝廷を本拠の開封に移し、唐の権威を借りて勢力を拡大しました。

907年、朱全忠は哀帝より禅譲を受けて後梁を開き、ここで唐は滅亡します。しかし、唐の亡んだ時点で朱全忠の勢力は河南を中心に華北の半分を占めるに過ぎず、各地には節度使から自立した群国が乱立しました。後梁はこれらを制圧して中国を再統一する力はなく、中国は五代十国の分裂時代に入ります。唐の滅亡により、中国は東アジア文明をリードする力を失い、契丹や日本など、唐文化の影響を受けた周辺の諸国は独自の発展をしていくこととなります。

「遣隋使」の足跡

隋は581年に建国し、618年に唐に滅ぼされました。その間、日本からは600年に第1回の遣隋使派遣し、都合4回派遣しました。

「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙^{つが}なきや」

隋の煬帝を怒らせた「国書」の一文です。中国王

朝の皇帝は、天から委任された唯一人として、文化の中心である中華と、その周辺の蛮人たちに君臨している建前です。東夷の倭が、「天子」を名乗ることは、無礼この上もないこと。かつて「日出づる処」と「日没する処」が問題視されていましたが、仏典の表現では、単に「東」「西」を意味するだけで、優劣の意味はありません。

次の一文は、第2回の遣隋使のしたためたものです。

「聞く、海西の菩薩天子(煬帝)、重ねて仏法を興すと。故に遣わして朝拜せしめ、兼ねて沙門数十人、来て仏法を学ばしむ」

隋の文帝と煬帝は、熱心な仏教信者でした。その情報を知った倭は、積極的に留学僧を送り込みました。それには、倭の国内事情があったのです。当時は蘇我氏に支持された推古天皇が、甥の聖徳太子と蘇我馬子に政治を委ねていました。推古朝は、冠位十二階の制定や中央での官司制の発展、全国的な屯倉の設置などが有名ですが、「仏教への肩入れ」も重要な仕事でした。飛鳥寺・法隆寺・四天王寺などの本格的寺院の建設はこの時代に完成しています。

ここで、聖徳太子に絡んで、もう一つ「十七条の憲法」について。この憲法は、役人の服務規程です。第1条の「和を以て貴しと為す」ばかりが有名ですが、第2条「篤く三宝を敬え(仏教を熱心に信仰せよ)」と第3条の「詔を承っては必ず謹め(君主の命令が絶対である)」を一体で考える必要があります。国家体制の中央集権が進み、仏教が国家の管理下に入った時期であれば、この条文配列が行われるとは考えられません。第2条と第3条の順番が逆か、場合によっては、第3条が冒頭に来ても不思議ではないのでは…。

外交使節としての遣唐使

遣唐使は、630年の第1次派遣から、894年の第20次まででした(海難事故などで未着のものや第20次のように出発前に中止したものなどを含みます)。

遣唐使最大の使命は、国と国の「対等関係」の構築でした。この使命は遣隋使の時と同様でした。ひとくちに遣唐使といっても、200年以上にわたる歴史がありましたから、それぞれの国の情勢に、

様々な変化がありました。そこで、その歴史は三期に分けてあります。

第1期は、630年の第1次から、669年の第7次まで。

この時代、朝鮮半島は高句麗・百済・新羅の三国が対立しており、この情勢を背景に、朝鮮半島を直轄支配しようとする唐と、朝鮮諸国に対する影響力を維持したい倭との間で、深刻な対立がありました。やがて新羅の要請で唐は半島に出兵。倭は百済の応援で半島に出兵しました。唐と倭は、直接対立したのです。「白村江」の戦いです。倭は、唐・新羅連合軍に完敗して朝鮮半島から撤退しました。やがて高句麗も唐に滅ぼされるに及んで、倭は唐に対して恭順の意を表明するために、669年に第7次遣唐使を派遣しました。「新唐書(日本伝)」には、この使節を「高句麗平定を賀するものであった」と記されています。倭は、その後の30年にわたり遣唐使派遣を断絶し、唐の侵攻に備えて防御策に専念しました。

朝貢下での第2期、国号を「日本」に

30年の空白を経て、702年の第7次から、777年の第16次まで。

「又倭国は、武皇后、改めて日本国と曰う」

唐の張守節が著した「史記正義(736年)」にある一文です。高宗の後である則天武后(武皇后)が、唐を廃して周朝を立てていた時期に交流が再開されました。一転して、倭が朝貢する形での再開でした。先の「敗戦」がその理由ですが、従来の「倭」を捨てて国号を「日本」にしたのも、関係があるのではないのでしょうか。そのせいか、この期間は穏便に進みます。

国際関係が変わる第3期

第3期の遣唐使は、平安時代の2回だけです。この時期になって派遣間隔は、25～30年になります。日唐交流も150年を超えて、多くのことを学ぶことに成功したことが理由ですが、遭難が多発したこと、朝貢品の負担が大きいことも、その理由ではなかったでしょうか。あえて多大な人的、物的犠牲を払ってまで、唐へ行く意味が薄れたのです。

一方、私貿易が盛んになります。朝鮮半島では新羅が覇権を握り、中国沿岸と交流を盛んにして、

唐一新羅一日本を結ぶ大規模な私貿易により、複雑な外交をしなくても、欲しいものが手に入る状況が生まれました。874年には、「入唐使」が派遣されました。「入唐使」とは、外交使節ではなく、下級役人で、香料や薬物を購入する使命を帯びて遣わされた使いです。

「唐の凋落」、「私貿易の普及」などが、やがて遣唐使派遣を中止する原因となりました。

■注

安史の乱(あんしのらん)：首謀者の安祿山は西域のサマルカンド出身で、ソグト人と突厥人の混血。貿易関係の業務で唐王朝に仕えて頭角を現し、宰相の李林甫に近付き、玄宗から信任され、さらに玄宗の寵妃・楊貴妃に取り入ることで、北方の辺境地域(現在の北京周辺)の三つの節度使(司令官)を兼任するにいたった。

陝北剪紙のふるさとは今 (2018年2月陝北の旅・報告)

田井光枝

3月号で、20年前に訪れた時の陝北黄土高原の様子を少しばかり書きました。5月の‘わんりい’25周年記念展開催にあたって陝北現状はどうであろうか、その様子を自分の目で確かめたいと思い、2月末から3月初めに掛けて安徽財經大学元教授の周路先生と‘わんりい’会員・岩田温子さん、日中藝術研究会事務局長・三山陵さん(首都大学東京非常勤講師)さんとともに周先生の元同僚・斉振倫さん運転の四輪駆動車で現地を駆け巡ってきました。

今回の旅も、これまでと同じ2月の一番寒い時期でした。が、ここにも地球温暖化の影響があるので、思ったほど寒くなく、防寒に心を砕いて準備した衣服が不要にも思えるほどでした。

飛行機が延安近くなって眺め下すと黄土の大地が波打って果てしなく続き、この大地を割って、まるまると太った大蛇のような黄河が鈍く光って湾曲しながら流れています。広大な陝北の風景は変わりようがありません。ここで必死に生きてきた人たちがいる！風景を眺めているうちにそんな感動が自ずと湧きあがって涙が滲んできました。

昨年11月、何年かぶりで北京を訪れ、その変わりようにびっくりしました。今回の陝北の旅でも現地の変貌にびっくりしました。田舎町の佇まいであった延安市も安塞の街も乗用車がひしめき高層のアパートがびっしりと立ち並んでいます。「十年ひと昔」というのですから、前回の訪問はふた昔前になるのですね。延安や安塞はもともと大きな町でしたからその変化は当然なのかもしれません。しかし、更に驚いたのは、陝北黄土高原の麓の街、延川の変わりようでした。



高層ビルが並ぶ延安市の今 (2018年2月26日)



1997年2月当時の、延川賓館前の風景 川を隔てた道路では馬車に曳かせた屋台に人々が群がって野菜や果物を買っていた。

20年前は私たちが泊まったホテルが唯一の賓館でした。ホテル真向いの斜面にヤオトン住居が並び、ホテル前を流れる川岸では荷車がそのまま屋台になって、折からの春節用の野菜や果物を買う人々が群がっていました。私たちはホテルに荷物を置くとすぐ飛び出して人々に混じって果物などを買ったものでした。今はそのスペースは舗装道路となって車が走り、ヤオトン(横穴住居)は消えて高層のアパート

が建ち、ホテルや店が並び夜遅くまで賑やかでした。しかし、街の裏側はすぐ黄土高原に続くのですから、いわば映画のセットの様な街で、烈風が吹けばあっという間に埃だらけで真っ黄色になるのではと思うのですが人々はそんなことはお構いなしのようです。

それにしてもびっしり積み木を並べたような高層の公寓(アパート)はいったい誰が住むのでしょうか。黄土高原に上^{のぼ}って見て分りました。かつてのヤオトンの村々はどんどん消えつつあるのです。

崖の南斜面に掘られたヤオトンは一般的に三穴で一家族が住むのが標準だそうです。一穴の広さは10畳から15、6畳あり、穴と穴は中で行き来できます。真南に向けて掘られてるので冬は奥まで日が差し込んで明るく、オンドルの上で休むので温かい。夏はぶ厚い土の中ですから涼しい、というように知恵を巡らせたなかなか快適な住まいでした。20年前、一緒に旅した仲間が「あら、素敵! こんな別荘が欲しいわ」と言ってました。まったく同感と思ったものです。

けれども、落盤の可能性はいつでもあり、近年になって崖の斜面に直接穴を掘ったタイプのヤオトンに住むのは安全を期して禁じられたのだとか。ラバで麓から水を運んだ道路は舗装されて車で移動できるようになりました。電気が通じ、水道が引かれて生活は格段に便利になったようです。が、もともと金銭的に恵まれていない人たちはです。新たに家を作り替えるよりは、たとえ長年住んだ土地には別れがたくとも高原を下りて町に住む方を選ぶでしょう。

農民戸籍の問題や耕作していたや農地はどうなるのかよく分かりませんが、若い人たちはどんどん山の下に生活の拠点を移しているようです。今回、私たちが歩いていても子どもたちは現れません。トウモロコシや唐辛子を庭一杯に広げた廻りを子どもたちが駆け巡り、口バが石臼を曳く。カシミヤヤギの群れがのんびりと草を食み、老人たちは長いキセルを手にヤオトンの前で寛ぐという風景は既に過去のものになってしまったようです。打ち捨てられたヤオトンを見るのはとても淋しかったのですがそれは旅行者の感傷というものかも知れません。天と地に祈りながらどうにか住み続けてきた荒々しい風土はもともと人々が農耕をして住むには適さない環境でした。

今は観光地として整備しているようで、私たちが黄河が大きく湾曲する乾坤湾近くの小程村のホテルに宿泊しました。今後は豊かになった中国の人々が観光バスを連ねて訪れ、黄河が180度向きを変える壮大な風景や黄土の大地を煌々と照らす月を眺めて自分たちの祖先に^{いつとき}一時思いを馳せる、そんな場所になるのかも知れません。道路は更に整備され、更に大きなホテルが建つでしょう。立派な黄河博物館は既に完成し、人々を楽しませるいろいろな設備が準備されつつあるようでした。観光化が進めば人々が戻り、以前とは異なる形で再び賑わう日が来るのかもです。

旅行中、何人かの剪紙作家の女性たちによって作品を見せてもらいました。女性たちは、先代の女性たちが確立した陝北剪紙スタイルを引き継いで、陝北の生活や身近な動物などを伸び伸びと意欲的に剪っていました。それぞれに味わい深く楽しいもので見飽きませんが、先代たちの個々の作品を見れば誰と分かったように、個性ある作品を剪って欲しいものです。

展覧会では参考作品として展示に加えますのでご覧ください。

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしく願います。尚、新年度の会費の納入は4月一杯に願います。また、新入会をいつでも歓迎します。途中入会の方には会費の割引がありますので、お問い合わせください。
年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

- ①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：044-986-4195(寺西)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田市民フォーラム4F・町田国際交流センター、町田生涯学習センター6F、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

今月も前回に引き続き、李清照の詞〔点絳唇〕を学びました。これも〔如梦令〕と同様「詞牌」の一つで、歌詞の内容を表わす題名はついていません。前回ご紹介した作品は4コマ漫画の様に日常を描写した、ちょっとコミカルな〈詞〉でしたが、今回の作品ではうって変わって夫の居ない閨の寂しさを嘆く演歌の様な内容で、李清照の真骨頂とも言える作品だそうです。

宋朝末期に生まれた当代きっての才媛であった李清照は、夫趙明誠と、当時としては珍しい相思相愛の仲でした。しかし、宋朝滅亡という時代の波に飲み込まれ、夫と離れ離れになってしまったようです。ひたすら夫の帰りを待ちわびる女性の気持ちが伝わります。

〔点絳唇〕という曲のタイトルからして、女性特有の鬱悶気を醸し出しています。点絳唇とは女性が口紅をさすという意味です。

深閨とは寂しい女性の部屋を指しています。この詩は類別すれば〈閨怨詩〉、男に捨てられた女性

の怨み節という一つのジャンルでもあります。柔腸とありますが、腸は心を表します。心根の優しいことを中国語では「好心腸」と言います。縷とは細い糸のことで、「千縷」は想いが千々に乱れること、です。「惜春春去」の「春を惜しむ」心情は漢詩のテーマの一つで孟浩然の「春暁」もその一つですね。また春とは若い女性のイメージでもあり、ここでは晩春の情景に、終わりかけた自分の青春を重ねています。「欄干に寄る」という言葉は、漢詩の世界で、男性なら故郷を想う、女性なら別れた夫や帰らぬ男性を待つ、という固定化したイメージを持ちます。

「天に連なる春草」の「春草」とは、屈原の死を悼んだ『楚辞』招隠子からの引用で、果てしない旅のイメージを持ちます。「望断」とは地の果てまで眺める、という意味で、「あの人が見えてくる道」を見つめ続ける女性の張り裂けんばかりの気持ちが最後の一句に込められているようです。

春の雨、消息の分からない夫、がらんとした部屋、

花が落ち、緑の草が広がり季節が変わるなかで、取り残されたような想い、自分の居場所を失ったような感覚…。このような思いは古今東西のありとあらゆる女性達が人生の中で一度ならず味わった共通の想いであるだけに、胸に迫りくるものがありますね。

さて、なぜ春を青春と言ひ、また女性のイメージを持つのでしょうか。これには中国古来からの陰陽五行思想が関連しています。「この考えは共通イメージとなっていて漢詩を作ったり味わったりするためにも覚えておくといいですよ」と植田先生が説明してくださいました。ホワイトボ

rú mèng lìng
点絳唇

lǐ qīng zhào
李清照

jì mò shēng wū
寂寞深閨，
róu cháng yī cùn chóu qiān lǚ
柔腸一寸愁千縷。
xī chūn chūn qù
惜春春去，
jǐ diǎn cuī huā yǔ
几点催花雨。

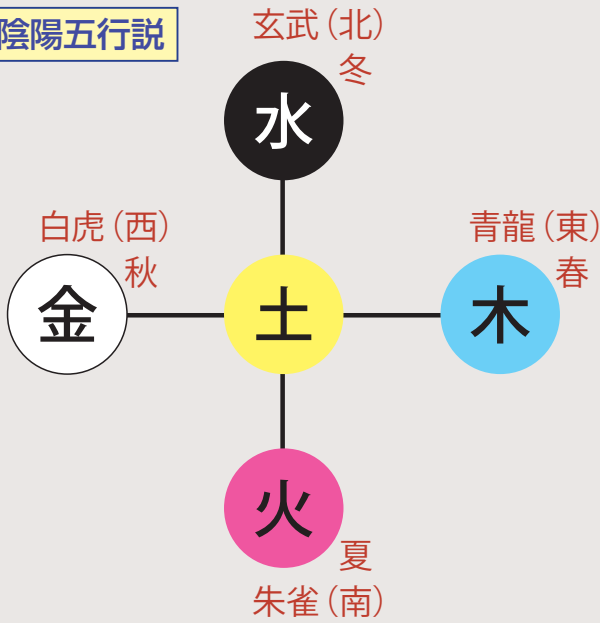
yī biàn lán ān
倚遍闌干，
zhǐ shì wú qíng xù
只是无情緒。
rén hé chù
人何处，
lián tiān fāng cǎo
连天芳草，
wàng duàn guī lái lù
望断归来路。

てん こう しん
点絳唇

李清照

わび ねや
侘しき閨に傷心の
しん さ ゆ
思いや千々に乱れける
春を惜しめど春去り逝きて
らっ かつが
落花促す雨ぞ滴る
欄干に寄り尽くす日々
ただ味気なく
いずこ
彼の人は今や何処に
つら しんそう
天に連なる春草の
きる
当てなき帰路を望み見る

陰陽五行説



一ドに図を描いてくださり、以下のように説明していただきました。

春は青、木、東、青龍、女

夏は赤、火、南、朱雀

秋は白、金、西、白虎、男

冬は黒、水、北、玄武

これに長夏(土用)、土、中央、黄龍が加わり五行となる。

青春という言葉はここからきていますが、春は女性、秋は男性という対比から、漢詩の世界では春は女性のもの、というイメージだそうです。このイメージは唐代中期ごろから詩に取り入れられるようになり、宋代には流行の頂点に達します。昔は40代になると老人でしたから、春は本当に短い、という想いから「惜春」という言葉が生まれたのでしょう。

しかし、現代に生きる私たちからすれば「40代で老人?」とはあまりピンときませんね。医療や科学技術の進歩で、今後は人生100年時代が来るといわれていますが、アラフォーの私もみずみずしい「青年」の心を持ちつつ、年を重ねていきたいな、と常々思っています。サムエル・ウルマンの名詩「青春の詩」のように……。

思えば、この漢詩クラスで、いつも目を輝かせて生き生きと楽しい漢詩の世界をお話しくださって

いる植田先生はじめ、大活躍の〈わんりい〉のメンバーの皆さんは「青春」の見本そのものですね。生きる姿勢が問われる時代のお手本に恵まれていることを改めて有難く思いました

さて、今回この「詞」の後に李清照の残した大変珍しい漢詩もご紹介下さいました。それがまた非常に男性的でびっくりしました。李清照が男勝りの豪傑であり、非常に幅のある才能を持っていたことを実感できる作品です。項羽が劉邦との戦いに敗れた時、川の渡し場で船頭が故郷に逃げるようにと申し出たのを断り、戦場の花と散った項羽の最期の想いに自分の思いを重ね、「いっそあの時死んでいればよかった」という激しい想いを、五言絶句の形で書き残しています。

xià rì jué jù 夏日絶句

lǐ qīng zhào
李清照

shēng dāng zuò rén jié
生当作人杰

sǐ yì wéi guǐ xióng
死亦为鬼雄

zhì jīn sī xiàng yǔ
至今思项羽

bù kěn guò jiāng dōng
不肯过江东

まき じんけつ な
生きては當に人傑と作り

ま きゆう な
死しては亦た鬼雄と為るべし

こうとう
今に至りて項羽の

あえ こうとう わた
肯て江東を過らざるを思う

宋词と言えは李清照、というほどに後世に名を残した女流詩人の人生を想うとき、愛と芸術という軸をしかと持ち、乱世を生き抜いた類まれなる意志の強さを感じずにはられません。日本もこれから、自分の軸を持って生きないと激流に流される時代がやってきますね。

この二首に出会えたのだから、李清照を見習い、しかと生きていこうと、思いを新たにした春です。

以下、蛇足ながら。



青春

サムエル・ウルマン 宇野収、作山宗久訳

青春とは人生のある期間ではなく
心の持ち方をいう。

バラの面差し、くれないの唇、しなやかな手足で

はなく
たくましい意志、ゆたかな想像力、もえる情熱を
さす。
青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは臆病さを退ける勇氣
やすきにつく気持ちを振り捨てる冒険心を意味
する。
ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青
春がある。
年を重ねただけで人は老いない。
理想を失うとき はじめて老いる。
歳月は皮膚にしわを増すが、熱情を失えば心は
しぼむ。
苦悩、恐怖、失望により気力は地にはい精神は芥^{あくた}
になる。

60歳であろうと16歳であろうと人の胸には
驚異にひかれる心、おさな児のような未知への
探求心
人生への興味の歓喜がある。
君にも我にも見えざる駆遣が心にある。
人から神から美、希望、よろこび、勇氣、力の
靈感を受ける限り君は若い。
靈感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ
悲嘆の氷にとざされるとき
20歳だろうと人は老いる。
頭を高く上げ希望の波をとらえるかぎり
80歳であろうと人は青春の中にいる。



Original版

Youth YOUTHの原詩です。

Samuel Ullman

Youth is not a time of life, it is a state of mind.
It is not a matter of rosy cheeks, red lips and
supple knees,
it is a matter of the will, a quality of the
imagination, a vigor of the emotions,

it is the freshness of the deep springs of life.
Youth means a temperamental predominance
of courage over timidity of the appetite, for
adventure over the love of ease.
This often exists in man of sixty more than a boy
of twenty.
Nobody grows old merely by a number of years .
We grow old by deserting our ideals.
Years may wrinkle the skin, but to give up
enthusiasm wrinkles soul.
Worry, fear, self-distrust bows the heart and
turns the spirit back to dust.
Whether sixty or sixteen, there is in every being's
heart the lure of wonder, the unfailing child-
like appetite of what's next, and the joy of the
game of living. In the center of your heart and
my heart there is wireless station, so long as it
receives message of beauty, courage and power
from men and from the Infinite, so long are you
young.
When the aerials are down, and your spirit is
covered with snows of cynicism and the ice of
pessimism, then you are grown old, even at
twenty, but as long as your aerials are up, to
catch the waves of optimism, there is hope you
may die young at eighty.



青春

原詩とは異なりますが、“How to Stay
Young”という題で1945年12月号の『リー
ダーズ・ダイジェスト』に掲載されたとされて
いる詩です。

サムエル・ウルマン 岡田義夫訳

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の
様相を言うのだ。
優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を
却ける勇猛心、
安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春

と言うのだ。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。

歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

苦悶や、狐疑や、不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰も長年

月の如く人を老いさせ、精気ある魂をも芥に帰せしめてしまう。

年は七十であろうと、十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。

曰く驚異への愛慕心、空にきらめく星辰、その輝きにも似たる

事物や思想に対する欽仰、事に処する剛毅な挑戦、小児の如く

求めて止まぬ探求心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く 失望と共に老ゆる。

希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる。

大地より、神より、人より、美と喜び、勇気と壮大、そして

偉力の靈感を受ける限り人の若さは失われない。

これらの靈感が絶え、悲嘆の白雪が人の心の奥までも蔽いつくし、

皮肉の厚氷がこれを固くとざすに至れば、この時にこそ

人は全くに老いて神の憐れみを乞うる他はなくなる。



Youth The Reader's Digest 版

Youth is not a time of life, it is a state of mind;
it is a temper of the will, a quality of the imagination,
a vigor of the emotions, a predominance of courage over
timidity, of the appetite for adventure over love

of ease.

Nobody grows old by merely living a number of years;

people grow old only by deserting their ideals.

Years wrinkle the skin, but to give up enthusiasm wrinkles the soul.

Worry, doubt, self-distrust, fear and despair- these are the long,

long years that bow the head and turn the growing spirit back to dust.

Whether seventy or sixteen, there is in every being's

heart the love of wonder, the sweet amazement at the

stars and the starlike things and thoughts, the undaunted

challenge of events, the unfailing childlike appetite for

what next, and the joy and the game of life.

You are as young as your faith, as old as your doubt; as

young as your self-confidence, as old as your fear, as

young as your hope, as old as your despair.

So long as your heart receives messages of beauty, cheer,

courage, grandeur and power from the earth, from man and

from the infinite, so long you are young.

When the wires are all down and all the central place

of your heart is covered with the snows of pessimism and

the ice of cynicism, then you are grown old indeed and

may God have mercy on your soul.

海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ③)

高島 敬明

前は、ノボロシースクでの3日目の朝が来てここでの生活がスタートしたところまででした。エンジニアリング会社のプロマネの生活指導の話に入る前に、まずノボロシースク市の紹介をしましょう。

1. ノボロシースク市とは

掲載1回目の地図にあるように黒海沿岸の町であり、主要港です。人口は約27万人(2016年)、面積は81平方キロの比較的小さな港町です。当市は、黒海艦隊の基地として1838年に建設されましたが、1722年以来その地を支配していたトルコに取って代わったのです。町の名前も「新しいロシアの町」の意味で命名されました。第二次世界大戦時にドイツ軍に占領されましたが、ソビエト軍の水兵の小部隊が225日間にわたり町の一部を死守したことによりノボロシースク市は「英雄都市」の称号を授けられました。

当市は、現在は産業都市であり、ロシアの海上貿易(黒海沿岸の都市ですが、ボスポラス海峡を通過して地中海に行くことが出来ます)に大きく貢献しています。多くの石灰岩を産出し、セメント工業が発達しています。前号で山並みが白く見える、と書きましたがこのためです。またロシアの主要なワインの産地の一つで、高品質のテーブルワインやスパークリングワインが造られています。記憶に留めたい都市ですね。

2. プロジェクトマネージャー(プロマネ)からの生活指導

さて娯楽室で、プロマネから生活する上で細部に亘る注意事項や留意すべき点の話がありました。要点をまとめると以下の通りですが、書いてみると改めて当時のソ連の国情が見て取れます。

・ × ・ × ・ × ・ × ・ × ・ × ・

●生活指導の要約

★『この地方は、西側の日本人にとっては入れないところで、港湾、空港はすべて国境とされているので警戒は厳重です。特に回教の国、イラン、トルコなどに地理的に近く宗教の問題は非常に敏感です。行動範囲も制限されていて国内でもパスポート所

持が義務付けられています。なお宿舎の責任者は最後まで高島さんをお願いしてあります。要望事項などすべて責任者を通じて上げてください』

★『ノボロシースク市は人口17万(当時)の比較的小さな都市ですが、小規模の海軍基地があります。また全国から集められた18～23歳の女学生約6千人の看護婦学校があります。一般人は勿論のことですが、特に看護婦学校の生徒とは決してトラブルを起こさないように願います』(クラスノダール地方は白人と黄色人種の接点であり、びっくりするような金髪の美人が多い)。

(なおソ連は性病が蔓延していて、万が一感染した場合は市民に感染する可能性から飛行機では帰してくれず、船に乗せて動物用のオリの中に隔離して日本に送還するそうです)。

★『事故や犯罪には、六つの組織が対応します。日本の通訳の解釈では、陸、海軍の憲兵・国境警備隊・縦の警察・横の警察・交通警察の六つの組織のことです』

縦と横が何を意味するのかわかりませんが、何か事件が起こり事情聴取のためどこかの施設に収容されたとしてもその場所がどこなのか日本領事館でも把握できず、ただ釈放を待っているしかないそうです。

★『国境都市のため工事以外で誤解されるような写真は絶対にとってはいけません。また軍事関係と思



工事現場事務所内部と通訳のBさん(窓際) (1978.4)



サブマネージャーのO氏(右)と測量確認。左は筆者(1978.6)

われるような場所には絶対に近づかないようにお願いします』

(軍隊、警備隊などの正門で記念写真を撮ればすぐ日本に強制送還されるそうです)。

★『この国ではアメリカ、西側との関係が良くないため、年配者、若い人すべてが英語教育は受けていません。その昔はロシアの宮廷文化はフランスに見習っていた関係で貴族間ではフランス語が話されていたようです。今でもフランスには大きな憧れを持っているそうです。その関係でフランス語を話すロシア人はたくさんいます』

(この点に関して私たちの通訳の説明をしますと、仕事において普段はロシア語と日本語を話せる通訳が1名付きます。しかしソ連海運省とフランスの下部工事業者と日本側との詳細打ち合わせでは、多いときにはロシア語⇄フランス語の通訳、フランス語⇄英語の通訳、英語⇄日本語の通訳、都合3名の通訳が付いたこともありました。当然時間はかかり、論点が分からなくなったこともあったようです)。

★『工事の進捗の段取りは、下部工事、橋脚部分はフランスの業者が担当、機器の運搬はソ連サイドの手配となります。日本側は、開梱作業からはじめ、溶接、保温、塗装工が順次現場に入ります』
(ソ連側の手続きや習慣に慣れなくて少し遅れ気味ですが心配するほどではありません)。

★『この国では「政治犯」と「経済犯」は最も重く処罰されます。市民は外国の品物が豊富でソ連に無い商品が買える「外貨ショップ」での買い物を切望しています。この場所には定められた外貨(ドル、円、マルク)を持っていなければ店に入ることが出来ません。特に市民はドルを欲しがります。外貨ショッ



ノボロシースク市内のフリーマーケット (1978.4)

プの品物は、高額で転売できるという旨味があるのです』

(当時、公称1米ドルが1ソ連ルーブルでしたが、市民間では、1ドルが3ルーブルで交換されていました。それでも前述のように旨味があるそうです。この通貨の交換も為替に関する重大犯罪とのことで嚴重に何度も注意されました)。

最後にソ連は、人種差別は皆無と言っていいほどありません。むしろ日本人は尊敬されています)。

・ × ・ × ・ × ・ × ・ × ・ × ・

と言って話が終わりました。

話が長々と続きましたが、やはり最高責任者として今回の仕事をやり遂げる上で心配事がたくさんあったようです。全員に対する説明が終わった後、私だけプロマネの部屋に通され、サブマネと3人のミーティングとなりました。そこで彼からは、「共産圏でのプロジェクトはわが社にとって初めてですが、今後の社運がかかっています。また責任者としてとにかく皆さんを無事に日本に連れて帰る使命があります。その意味で宿舎での寮生の管理を厳しくお願いします。高島さんも寮生の模範となるように努めてください。」との話がありました。プロマネ、サブマネともに経験豊富で仕事に精通され、紳士で使命感に燃えている立派な人でした。この二人なら私も、作業員も最後までついていけると感銘を受けました。共産圏の何も知らない国に来て不安なことがたくさんありましたが、それも一気に吹き飛んだ気持ちになりました。

次号は、日本から派遣されている我々の食事を作ってくださいの「(株)魚国」のcockのSさんのお話を中心に書いていくつもりです。

(続く)

第4章 高鳳蓮・最近の剪紙

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

高鳳蓮は剪紙を剪るようになって十数年の後、民間芸術の剪紙分野で不動の地位を獲得しました。このころから、彼女の剪紙作品の形式は大型化し、物語性を帯びて来ました。彼女の剪紙は、初期の「窗花^{そうか}注1」を脱して、現代絵画、装飾絵画に匹敵するものになっていきました。

高鳳蓮のこの時期の作品は、更に挑戦的になり、見る人たちの気持ちを引き立てるものが多く、展覧会場では精彩を放って度々入選の榮譽を勝ち取りました。20枚の赤い紙で作り上げた一幅の巨大剪紙《陝北風情》は、ギネス世界記録に申請できるほどのサイズで、高鳳蓮の剪紙芸術の豪快な雰囲気^{そうか}を十分に醸し出しています。従来の「窗花」から現代芸術作品に進化し、作品の内容は単純なイメージから、言葉での説明が必要な場面描写だったり叙事詩のような巨大な大作へと変化していきました。更には、二十四孝のような、「物語」的なものを作品の題材にして行きました。(以下、これらの作品は高鳳蓮叙事作品と呼ぶことにします)。

高鳳蓮叙事作品の中で、特筆すべきは、《梁山伯と祝英台》で、これは2枚の赤い全紙を組にしたもので、画面いっぱい^{そうか}に花が咲き乱れ、人物は物語の主役二人に限らず何人も登場しています。それは



黄河河畔の人々。三枚組剪紙の1枚



六駿馬

高鳳蓮の説明を聞いて初めて納得できるような黄土高原版の《梁山伯と祝英台》なのです。この他、《陝北の情景》や《黄河河畔の人々》と言った、何枚かの似たような大剪紙作品があります。

高鳳蓮の剪紙創作に対する意欲はますます高まり、彼女の得意な《六駿馬》を神前に奉納することになり、部屋の外で、周囲を掃き清めてから額装をし直し奉納しました。

《六駿馬》の中の6頭の西域の名馬は、それぞれに元気いっぱい、顔つきも精悍で、見る人に漢代



梁山伯と祝英台三枚組剪紙の1枚



陝北の情景(部分)



河の神

の“昭陵六駿”のレリーフ——唐太宗・李世民の昭陵の北祭壇上の最も重要な石刻の一つを思い起こさせる雰囲気があります。この六匹の駿馬の原型もまた、李世民が生前最も愛した六匹の軍馬で、彼が高祖・李淵の天下平定を助け、建国した時に騎乗していた愛馬です。

著名な民間芸術評論家・靳之林氏は、高鳳蓮を評して言っています。

「高鳳蓮の剪紙芸術の特徴は、豪快で飾り気なく、勢いが溢れんばかり、意気盛んで、まるで、原始社会・^{ヤンシャオ}仰韶文化^{注2)}の岩画が漢唐社会の石像石刻文化へと発展し栄えた民族精神を継承しているようだ。清朝末の繊細な複雑さは微塵も持ち合わせていない。彼女の芸術気質は、黄河流域、黄土高原に暮らす陝北の人々の、素朴で健康的な感情の集約でありその結晶である」。

この時期の高鳳蓮の剪紙作品は、既に完全に^{そう}窓^かのジャンルを抜け出し、神霊・人生・祖先を題材にする作品に変わって行きました。しかし、これらの作品に盛り込まれたテーマが多すぎて、どうしても文字の助けを借りて表現しなければならないこともあり、文字を知らない高鳳蓮にはかなりの苦勞が強いられました。



乾坤湾(黄河が大きく曲がった、延川県の景勝地名)

下図は、20枚の赤い紙を使用した、《高家圪坨村風景》と言う作品です。画面の上部に2匹の竜を配置して黄河の神を表しています。鶏・家鴨・鷺鳥など沢山の動物が図案の中央に剪り込まれ、牛・馬・羊・豚など多くの家畜が庭に溢れています。

人々が食べ物に困まれ、食の苦勞をしていないことを表すことが、子孫の、祖先に対する供養だと考えられています。真ん中の上方には、窑洞が幾つか描かれ、開いた窓からは、人々が敬う神々の位牌を垣間見ることが出来、延川地区の窑洞らしい雰囲気醸し出しています。左下角には、石の鼓が置かれ、毎日の生活を、太鼓をたたいて応援する意味を込め、右下角には獅子を配して、人々の一生涯の平安無事が守られることを願います。陝北の情緒がふんだんに盛り込まれた剪紙です。

民間の剪紙芸術は、野の花と同じで、季節に合わせて自ずと咲き、枯れていき、興味の赴くままに自分自身が楽しめます。野の花は降雨がタップ



高家圪坨村風景



創作中の高鳳蓮

りあり、日照が十分なら美しく咲き、降水が多過ぎ、灼熱の太陽に曝されれば、しぼんで、朽ち果ててしまいます。人々の中には、草花を温室に移植して育てようとする人がいます。花は美しく咲いて、人々を楽しませますが、野性味が薄れ、而も再び風雨に打たれ、陽の光にさらされることに耐えられなくなるのです。自然に従うのが、万物成長の法則ですが、民間伝統の剪紙も当然、その法則からはずれることはありません。

2001年から2003年までの2年間、筆者は研修の為、延川県文化局に勤めました。当時、出来るだけ一、二か月に一度は、白家原にある高鳳蓮の家を訪れましたが、剪紙に関することはほとんど話題にせず、もっぱら、その年の収穫の事や、日常の家事の事、子供の事、農作業のことなどを話しました。私は、高鳳蓮に剪紙のことで、頭を悩ましたり、神経を使ったりしてほしくなかったのです。

下記はある日の、高鳳蓮と筆者が交わした会話です。

「周さんは、ここ何年かずっとこんな山奥で過ごしているけど、家のことは心配じゃないの?」

「妻は、長年連れ添っているのです、慣れっこになっていますよ。娘も、小さい時から、父親はいつも出張していると分かっているんですよ」

「子供が女の子一人では寂しいでしょう。奥さんをここへ呼んで、ここでもう一人子供を産みなさいよ。私が面倒を見てあげますから」

「それはいいアイデアですね。でも手続きが面倒ですよ」

「何が面倒な物ですか! 周さんは、お金がかかるのを惜んでいるんでしょ!」

私は何も言えず、只苦笑いするだけでした。

又、ある時、高鳳蓮は真剣に、私に訊ねました。

「毎朝、中央テレビの番組に私の作品が出ているけど、私は支払う必要があるかどうか訊いた方がいいと思いますか?」

きっと誰かが彼女に入れ知恵をしたに違いありません。毎朝、中央テレビが決まった番組の画面に、高鳳蓮が作成した剪紙が使われていることに対する素朴な疑問なのです。私は答えました。

「高さんは剪紙の名人で、有名人ですから、払う必要はありません。それに会社がコマーシャルを作るとすれば、数秒で一千万円以上になりますよ」

この回答は、高鳳蓮の質問に対してきちんと答えていないし、常識的なことしか言えないので、彼女が満足していないのは明らかでした。

中国中央テレビ局内の多くのチャンネルで取材して編集したものはどれも局の重要な番組です。幾つもの番組が国際的なコンクールに出品して賞を得ています。たまにしか高鳳蓮の家を訪ねていない私でさえ、何回か取材に鉢合わせしています。私がかつて外国で展覧会を開催して、テレビ局のインタビューを受けたり、番組を収録した時には、必ず、なにがしかの報酬を貰いました。しかし中国のメディアにはそんな習慣はありませんから、度々取材があっても、高鳳蓮には僅かなお金も支払われていないのかも知れません。

■注

1) 窗花(そうか): 窓飾りに貼る切り紙

(Weblio 日中・中日辞典)

2) 仰韶文化(ぎょうしょう-ぶんか): 中国、黄河中流域に栄えた新石器時代の文化。磁山文化に続く農耕文化で、紀元前五千年紀から長期間存続した。彩陶の使用を特徴とする。河南省仰韶村の遺跡の名にちなんで命名。

(goo 辞書より)

樹木・花にまつわる物語

第3回 アンズ 杏

河本義宣

アンズは中国名「杏」で原産地は中国東北部。日本への渡来は定かではありませんが、万葉集には「杏人」の表記があり、カラモモ、カラヒト、モモサネなどと読まれています。平安時代には種子が薬用に用いられていました。学名は *Prunus armeniaca*。Purnusはサクラ属でスモモ、ウメ、アーモンドなどが仲間で、英名はアプリコット。果実は食用、「神農本草経」で種子を杏核仁といい、主治は、治咳逆、上気、雷鳴、喉痺、下気、金創、寒心、賁豚として中品ちゆうほんに収録されており、日本では咳止め・カゼの予防の生薬「杏仁」として日本薬局方に収録されます。

アンズの林・「杏林」は、中国医学(中医)の別称として用いられ、日本では大学や製薬会社の名前に使われていますが、以下の故事に拠ります。

三国時代、呉の国に董奉という医者が居ました。ある時、役人が重病になり、何人かの医者にかかりましたがよくなりません。董奉が診ることになり、丸薬を3つ飲ませました。患者はすぐに意識を取り戻し、数日のうちに元気になりました。このことが評判となり、大勢の患者が来診するようになりました。

董奉は身分の分け隔てなく患者を診察・治療し、金持ちからはそれなりの治療費をもらいましたが、貧乏人からは治療費を貰いませんでした。その代わりに、用意してあるアンズの木を庭に植えてもらいました。年経ずして大きくなったアンズの林か



川崎市にて2018年3月、筆者友人撮影



アンズの実(「GATAG」フリー写真素材集)から

らは、沢山の実と種子が採れるようになり、^み実は食べ物として困っている人に分け与え、種子は薬として使いました。

後世、人々はアンズの林を見るとすぐに董奉の優れた医術と高尚な遺徳を思い出して「杏林」を中医の別称に使うようになりました。日本でもこの故事に倣って医療に関わる場所に「杏林」を使うようになりました。この故事を四字熟語で「杏林佳話」いい、医術に優れた医者かたを「杏林高手」と呼ぶようになりました。

ほぼ同時代に華陀かたという医者が居ました。関羽が魏の曹仁と戦って毒矢(トリカブトの毒)が当たった肘の骨の中から毒を取り出す手術をしたことが三国志に出て来ます。華陀は麻酔薬が処方出来、関羽に勧めますが、これを断り、碁を打ちながら手術を受けたと記されています。その後、曹操の頭の治療にも関与します。曹操は頭痛持ちでした。華陀を呼んで診察を受けたところ、頭痛の原因は「風涎(脳腫瘍)」を患っているからだかたと診察し、開頭して、腫瘍摘出を勧めます。「病気の治療に頭を開くなど聞いたことが無い。関羽と親しいお前は私を殺す気か」と投獄し、拷問にかけて殺してしまいます。

華陀は外科医の名医と知られており、医学部医史の講義にも必ず登場するそうです。

■今月号は、筆者のパソコンが壊れて、写真が取り出せなくなりました。従いましてネットから拝借しました。

キルギス映画「馬を放つ」(89分)
～ 昔々、馬は人の翼だった～

第90回アカデミー賞外国語映画賞キルギス代表、ベルリン国際映画祭パノラマ部門国際アートシネマ連盟賞などシルクロードの要所として栄えた地で映し出される、郷愁的な映像美。(監督・アクタン・アリム・クバト)



- 岩波ホールにて4月27日(金)まで上映中(神保町駅徒歩0分)
- 11:00/13:00/15:00/17:00/19:00
- ※日・祝は、19:00の上映はありません

映画の舞台は、標高5000mを越える天山山脈のふもとに広がる山岳と草原の国であり、シルクロードの拠点として繁栄してきたキルギス。監督の強いこだわりにより自然光で撮影された映像は郷愁的で、観る者の心を揺さぶる。また、夜の闇に対比するように映し出される、優しい光に包まれた風景からは、未来へ向けられた監督の眼差しを感じさせる。流れる時のなか、失われゆく“馬”と“人”との絆が甦る時、美しく幻想的な物語が生まれる。

中国文化センターのイベント2題

I. 中国戯曲シリーズ講座：第三回 京劇における西遊記
日本でも有名な伝奇小説「西遊記」は中国でも人気があり、自由闊達で愛くるしい孫悟空の活躍する京劇演目の様式と魅力について日本人京劇俳優・石山雄太さんが語ります。

- 日 時：4月25日(水)、15:00～16:30
- 会 場：中国文化センター ● 定員：先着80名
- 参加無料：4月24日までにお申し込みください
- 講 師：石山雄太(日本語)

講師紹介：小学生の時、TVで京劇の孫悟空の演技を見て魅了され、京劇俳優を志す。高校卒業後、中国戯曲学院に留学。外国人初のプロの京劇俳優として中国京劇院(現・中国国家京劇院)に入団。帰国後、京劇普及のため精力的に公演活動を続ける。立教大学兼任講師。

II. 4月の映画上映「建国大業」(ドラマ)140分・日本語
原題：建国大業 監督：韓三平/黄建新
● 4月26日(木) 15:00～

▲ **中国文化センターイベントの申し込み方**
中国文化センターのHPを開き、参加を希望するイベントをクリックし、申し込み受付中をもう一度クリックしフォームを完成して送信する。
または電話(03-6402-8168)へ

張宝華 追悼京劇公演

三国志 『鉄籠山』

- 2018年5月20日(日)(開場 15:30/開演 16:00) ※全席指定、字幕付き
- 世田谷区・成城ホール(世田谷区成城6-2-1小田急線「成城学園前」徒歩4分)
- チケット 一般：5,500円 / 世田谷区民：5,000円 / 学生：2,000円

▲ **チケット取扱：**

- ◆ ☎ 080-4478-7009(担当：衛藤)
- ◆ 新潮劇院ホームページ <http://www.shincyo.com/kouen/180520/main.html>

張宝華(ジャンバオファ)

1930年9月、北京郊外(現在の通県)生まれ。中国国家一級芸術家。もと鳴華京劇団団長、北京風雷京劇団団長、北京戯曲学校教授。京劇団を経営する父の元に生まれ、5歳の時より名だたる著名な俳優に個人指導を受けて芸を学び、6歳から舞台上がるようになる。1952年、父の劇団は名を「鳴華京劇団」(現「北京風雷京劇団」)と改め、22歳の若さで後を継いだ。1954年、北京第一戯曲公演演技賞、1956年北京戯曲大会最高演技賞受賞。2017年10月4日、北京にて逝去。享年87歳。息子である在日京劇団「新潮劇院」を主宰する張春祥が父・張宝華の名舞台を追悼公演する。



【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これらと思うイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。又会の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、ご感想をお待ちしています。



日中文化交流市民サークル 'わんりい'

第66回ベルリン国際映画祭・銀熊賞受賞

中国映画「長江愛の詩(うた)」(115分)
監督：ヤン・チャオ(楊超)

小さな貨物船の船長となったガオ・チュンは、ある日機関室で「長江図」と題された一冊の詩集を見つけた…。名カメラマン、リー・ピンビン(李屏賓)が撮影を担当した叙事詩的なラブストーリー。極寒の長江とその周辺での、60日のオールロケによる撮影を敢行した映像美が絶賛を博した。

- 上映館：川崎市アートセンター・アルテリオシネマ
小田急線「新百合ヶ丘駅」北口より徒歩3分 ☎044-955-0107
- 4月14日(土)～20日(金)19:40(4/16休映)
- 4月28日(土)～5月4日(金)10:00(5/1休映)

◆わんりいの講座

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

- ▲まちだ中央公民館 10：00～11：30
4月15日(日) 第3・第4学習室
5月27日(日) 第3・第4学習室

▲講師：植田渥雄先生

(桜美林大学名誉教授、
現桜美林大学孔子学院講師)

- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：20名(原則として)

* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。

- ◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)
E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



◆わんりいの催し

**ボイストレーニングをして
日本の歌を美しく歌おう！**

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

- 4月10日(火) } 10:00～11:30
- 5月15日(火) } まちだ中央公民館・視聴覚室

★動きやすい服装でご参加ください

- 講師：Emme(歌手)
- 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員：15名(原則として)

- ◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)
E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



会員募集！【中国語入門サークル】

和気藹々と中国語を勉強しているサークルです。楽しみながら中国語を始めませんか。見学ご希望の方は気軽にお問合せください。

- 会場：町田中央公民館(原則として)
- 日時：第1・第2・第4土曜日
10：00～12：00
- 会費：4,000円/月3回
- 講師：郁唯(天津師範大学卒)
- ◆問合せ：☎042-725-3963(森川)
E-mail:yamorikawan@ybb.ne.jp



継続25年 **【わんりい中国語勉強会】(中級)**

‘わんりい’活動の母体として始まった中級程度の勉強会です。楽しく中国語を学んで25年になります。テキストによる学習のほかに中国語でのフリートーク、作文、聞き取りなどもやっています。見学は連続4回まで無料です。

- 場所：鶴川市民センター(町田市大蔵町1981-4駐車場有)
- 日時：毎週火曜日(月4回)19：00～21：00
- 会費：月額5,000円(授業料・会場費など)
- 講師：郁唯(天津師範大学卒)
- ◆テキスト：「风光汉语・中級口语Ⅱ」(北京大学出版)
- ◆問い合わせ：☎042-735-2717 三澤
E-mail:fwjg1705@mb.infoweb.ne.jp

**時代を先取り！中国語を勉強しましょう！
岡上中国語勉強会**

- 場所：川崎市麻生市民館岡上分館、又は、川崎岡上老人いこいの家
- 日時：毎週土曜日(月4回)10：00～12：00
- 会費：月謝5,000円(授業料・会場費など)
- 講師：劉冠群(北京出身)
- ◆問合せ：☎044-865-3757(久保田)まで
お気軽に見学においでください。

**初心者のための体験のお誘い
【鶴川水墨画教室】**



- 講師：満柏(日中水墨協会・会長)
- 場所：鶴川市民センター(町田市大蔵町1981、駐車場有)
- 曜日・時間：第2又は第4月曜日
14:00～16:00
- 体験参加費：1000円(見学無料/手ぶらで参加可)
- 問合せ：野島☎042-735-6135

‘わんりい’に連載の「フィリピン滞在記」(為我井輝忠著)が「フィリピンふれあい紀行」として本になりました

2014年11月から16年10月までの2年間、日本語教師としてフィリピンに滞在した。

当初、フィリピンについての知識が不十分で、戸惑いや分からないことだらけであった。なんとかそれらを乗り越えて、日本語を教えることや日々の生活を楽しめるようになった。そうした日々の思いや出来事を「フィリピン滞在記」として‘わんりい’誌に掲載した。2年間の連載をひとつにまとめ、今回文芸社から『フィリピンふれあい紀行』として出版することができた。ご興味のある方は小生までご連絡ください。



- ▲問合せ：☎042-735-9583(為我井輝忠)
E-mail:weiwojing@yahoo.co.jp

第28回 インターナショナル・オルガン・フェスティバル・イン・ジャパン
オーストリア・ウィーンシュテファン大聖堂 主任オルガニスト
エアンスト・ヴァリー 来日公演!
<http://www.saegusa-s.co.jp/con180620-22.html>

- 6月20日(水)東京カテドラル関口教会聖マリア大聖堂
19：00開演(18：30開場) 5000円全席自由
- 6月22日神奈川民ホール(小ホール)
18：30開演(18：00開場) 3000円
※参加費は20%引きになります。
- ◆問合せ：☎044-981-6171(山田賀世)

‘わんりい’ 25周年 / 倉石賞受賞記念

果てしなく広がる黄色い大地の華 **陝北剪紙** (切り紙)

参加無料

会場：中国文化センター <https://www.ccctok.com/> 東京都港区虎ノ門3丁目5-1 ☎03-6402-8168

2018年5月14日(月)～18日(金) 10:30～17:30
(初日15:00 最終日13:00迄)

- 5月14日 15:00 中国民族音楽演奏 曹雪晶(二胡)/銭騰浩(中国笙)
15:30 オープニングパーティ 16:00 交流会、お楽しみビンゴ
- 5月15日 14:00 講演会「中国の剪紙」
講師：三山 陵(首都大学東京非常勤講師 日中藝術研究会事務局長)
15:00 陝北黄土高原の暮らしと人々(スライド上映)
- 5月17日 15:00 映画「黄色い大地」(1985年/94分、中国語字幕)
監督：陳凱歌 撮影：張藝謀

映画「黄色い大地」紹介：1985年にロカルノ国際映画祭で銀豹賞を受賞した。陝北黄土高原をドラマの舞台に選んだ陳凱歌監督のデビュー作。張藝謀撮影の、美しく美しい陝北の風景と、人々が心情を託して歌う陝北の民謡「信天游」が心を打つ。

展示剪紙紹介：時に黄砂が吹き荒れ、至る所深く割れる丸裸の大地・陝北黄土高原。人々は実り少ない耕作をし、家族の無病息災と平安を祈って剪紙を切り、ヤオトンと呼ばれる横穴式住居の窓に貼った。極貧の風土の女性たちの剪紙作品が1980年代、北京美術学院教授・靳之林等によって発見され認められるや、窓に貼られた剪紙は大きく羽ばたいて窓から飛び出していった…。異能の剪紙作家・高鳳蓮初期の作品他、20世紀末の陝北女性たちの心意気が溢れる剪紙作品大小500点余りを展示する。

主催：日中文化交流市民サークル ‘わんりい’ / 中国文化センター 後援：中国大使館・文化部/(公財)日中友好会館/(公社)日中友好協会

★「陝北黄土高原の旅」に関心をお持ちの方へ

変わりつつある陝北黄土高原を訪ねて、現地のすごさを実感してみませんか。果てしなくという表現しか思い浮かばない黄土の広がりの中を大蛇のようにうねり流れる悠久の黄河の流れにきっと感じる何かがあると思います。

旅のコーディネーターは ‘わんりい’ の何人かの皆さんがよくご存じで、‘わんりい’ の新年会にも参加されたことのある、山西省国際旅行社・黄玉雄さんにお願いました。

下記スケジュールは私が案として提案する大雑把なもので確定ではありません。費用などはまだ分かりませんが、お申し出頂いた方には詳細が決まり次第ご連絡します。実施は、この地方が一番美しいという9月予定です。

尚、この旅行は希望者によるツアーです。

9月の陝北旅行計画(案)

1日目	東京→西安		西安泊
2日目	西安→延安	移動の途中で黄帝廟見学 革命遺跡見学	延安泊
3日目	延安→小程村	黄河博物館見学	小程村泊
4日目	小程村滞在	乾坤湾 清水閣見学ボート又は遊覧船に乗って黄河で遊ぶ	小程村泊
5日目	小程村→延川	高鳳蓮芸術館見学 文安驛古鎮(注)の見学	文安驛古鎮泊
6日目	文安驛古鎮→西安	時間があれば始皇帝陵・兵馬俑・華清池など見学 或いは自由行動	西安泊
7日目	西安→東京		

注)：明清時代には規模が比較的大きな宿場町で、貨物の集散地として賑わっていた。高鳳蓮芸術館がある近くで宿泊設備もある。

■問合せは：田井 ☎042-734-5100
E-mail:wanni@jcom.home.ne.jp

‘わんりい’ 232号の主な目次

「寺子屋・四字成語」明察秋毫(11)……………	2
論語断片(35)「堂に ^{のぼ} り室に入る」……………	3
天府の国・四川省(2) 峨眉山へ……………	4
混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義(22) ……	6
東西文明の比較(23) 唐は「内憂外患」……………	8
陝北剪紙のふるさととは今……………	10
「漢詩の会」(20)李清照の詞〔点絳脣〕……………	12
海外出張の思い出・日ソ連③……………	16
黄土高原に咲く目にも彩なる花々VI……………	18
樹木・花にまつわる物語③アズ 杏……………	21
‘わんりい’ 掲示板……………	22・23・24

【4月定例会開催日及び5月号‘わんりい’発送予定】

問合せ：☎044-986-4195(わんりい)

- 定例会：4月10日(火)
13:30～三輪センター・第三会議室
※定例会は ‘わんりい’ の活動に関心のある会員の皆さんはどなたでも参加できます。上記にご連絡の上ご参加ください。
- 2018年5月号 ‘わんりい’ 発送日
4月30日(月・休) 10:30～
※おたより発送日は弁当持参です